

賢明女短大

六代典行 本庄哲郎 ○田藤幸子

〔目的〕数年来、教育界でも例外なく浸透してきたパソコンは対象学生の能力・適性・興味・関心・経験の多様化が見られ、情報収集と活用・管理を導入した中学校技術・家庭科の「情報基礎」との関連からも今後家政科の重要な課題ともいえる。本学では5年前パソコンを設置、将来に互る学生の能力拡大、有職化などを配慮した教科を導入し質的向上を期待した実践教育を試行している。今回、受講生への教育効果をねらいに意識調査を実施した

〔方法〕本学家政科学生306名を対象、平成3年1月、次の項目で意識状況を調査し検討

①入学以前のパソコンの知名度およびその時期・機会、イメージと関心度、保有状況など

②内容・教材に対する履修前後の興味・難易・意欲・効果の意識度 ③将来への活用など

〔結果〕①大半はマスコミを通じて言葉として中学までに87%が知っているが逆に使用経験は高校以後に多く81%で、家庭・学校を機会とし特に14%は授業経験がある。イメージでは便利・時代の先端・難しい・高価などに集中し、保有率は20%、一方欲しくない者は25%で前回より倍増しこの点関心の高まりを意識する81%に対し差が大きい ②履修後、興味・意欲はいずれも85%で上昇傾向を認めた。ハードウェアとソフトウェアでは後者に関心が高く、ワープロの興味45%・役立つ68%、アートマスタの興味32%、この他マルチプランも比較的興味や実用性が高い。これらに対して難しいと意識するものが多く81%を占め特にソフトウェアの表計算・データベース・プログラミング言語に集中し反面ワープロの場合一年次より二年次に互って67%より9%に減少、栄養価計算も含めて操作上の馴れで解消する傾向が伺える ③効果では情報化社会の一端を知る機会と同時に就職に有利・資格の取得など強い有職化と実用志向を認めた。